

残念な、お留守番

準備の段階から、嬉しくて楽しい「花風五周年記念パーティー」で、唯一残念だったのは当時九十五歳のMさんが、体調不良で参加できなかったことでした。

二年前に計画していた神恵内キャンプも、その時体調不良で参加が難しかったMさんのために中止したくらいに、全員そろってお出かけは「花風」の大原則でした。

ところが今回はキャンセルが無理なため、ひたすらMさんの回復待ちをしました。大英断は私ではなく、Mさんがしました。

「留守番するから、行っておいで」
「やつぱり、二時間座っているのはつらいかしら？」
「うん。寝てる方が良い」

そんな会話があつて、Mさんはお留守番ということになりました。

ちょうどこのころから、Mさんの体力は大きく低下をたどるようになり、ベッドで横になっていて時間が増えていきました。それでも、Mさんの強い希望で起床時間は遅くなっても日常着に着替え、食卓で食事をしていました。排泄もトイレでした。スタッフのサポートに支えられながらトイレに通っていました。起き上がることも、

歩くことにこだわりを持っていて、食事が十分にとれなくなり、点滴に栄養を頼る状態になつても、Mさんは毅然として自分の足で歩こうとしていました。

「よ」とは言いませんでした。当たり前だと、付き添っていました。

「よ」とは言いませんでした。当たり前だと、付き添っていました。

歩けるようになった時の感激を

花風屋繁盛記

連載15

人と人がつながって



NPO法人在宅生活支援サービスホーム花風

木村美和子理事長

ので、Mさんにとつて歩くことはつらいことではあるけれど、喜びもあるのかもしれないと思いましたが、最期まで歩くことをあきらめないでいたMさんは、今でも私のお手本です。

最期まで 日常で過ごす

Mさんは伏せる時間が多くなつてからは一階に移されたベッドで過ごしていました。そこに来て下宿

人たちが代わる代わる声をかけます。

「どうしてこうなつたのさMさん。ご飯も食べないんだもんね」と、Aさん。

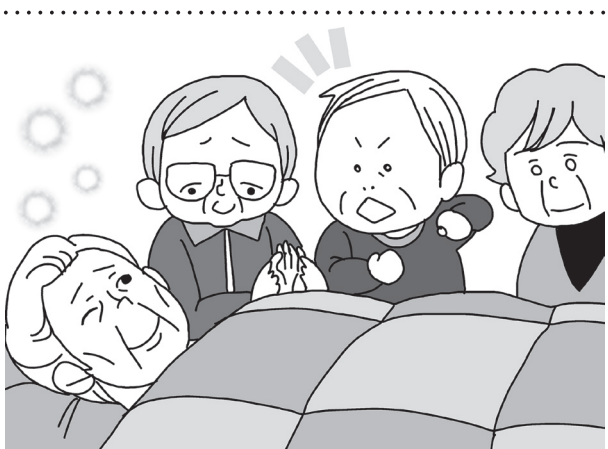
「手が冷たいね」と言いながら、優しくさすっているのはHさん。

「ばあちゃん甘えたら駄目だよ。自分で頑張らないとね」

と、ちよつと辛口の後、私の耳元で「こつこつという時には何クソ！ っと思わずこと言つた方が良いんだよ」

Mさんの望む 通りに

Mさんは二〇〇五年十一月十二日、下宿人



イラスト・木村玲

「本人の希望は理事長さんがよく分かっているはずなので、その通りにしてください」と、あくまで本人の希望を尊重したいということでした。生前Mさんが語っていたのは「拝まなくてもいいから、三日三晩飲んで食べるのが良いですよ」でした。

亡くなられた夜は、下宿人たちとスタッフだけでお別れ会をしました。赤白、黄、桃色のカーネーションを一人ずつ献花した後、

「この時間はMさんの思い出を語るだけの時間とします。いっぱい、いっぱいMさんを語ってください」

と、みなさんにお願ひして会を始めました。「本当のお姉さんのようだった」

涙をふきながら話すと、Oさん。「ばあちゃんは偉かつたねえ」

みなさん、Mさんが亡くなられたことをちゃんと認識して涙いっばいに語ってくれました。

それを見ながら私はこう思いました。笑顔を取り戻した時がスタートで、感謝すべきこと「ありがとっ」

そうして、誰かを思つて泣けてゴールからも見人である甥のNさん